

の今は、割箸で一粒々々炒った椎の実をはさんで、友だちの掌にわけ入れている。一カ年の成長の姿である。秋の日はゆたかにこの子等の頬を照らし、ミレーの絵に見られるようなこの情景が、保育者の心を素材にかえらせ、敬虔けいけんなものですがすがしく心に流れてゆく。

水道の蛇口につけたホースを、すっぽりと砂の中に埋め、そのホースの先を土管につなげ、更にその土管から細い二本の土管に分岐させて水が流れ出るように工夫し、砂山の頂の湖らしいものに、その水を底から湧く泉のような仕掛で水を注ぎ入れる。これが四月に入園した男の子五、六人の、小半日の労作である。普通の池とちがい、底から噴出する仕掛なので水は濁らず、滾々こんこんと湧いて静かに溢れている。そこが苦心のしどころで、箱根の寮に合宿した時、船で渡った芦の湖の再現であろうか。大人の知恵の及ばない領域である。

東山魁夷画伯はその画集の中で

私は白い紙に向い合う。それは紙では無くて鏡である。その中には私の心が映っている。描くことは、心の映像を定着させようとする作業である。――

この紙を、子どもと置きかえて、そんな心意気で朝毎の幼稚園の門をくぐり度いものと念願している。(一九七四・一〇・二二)

## 山道 陵子とし

「あなたは、幼児保育者という人間芸術家である。」倉橋先生は、このように述べているが、本当に私たちは幼児保育者として該当するだろうか。

時代も変わり、世の中も日に日にあわただしくなってきた。けれども、子どもの持っている本質的な子どもらしさ(芸術性)は、どんな時代においても普遍であると思う。この「子どもらしさ」を持っている子どもを、一瞬のうちに発見し、そしてさらに、うわべだけ子どもらしさを持った子どもと見分けることのできる幼児保育者であり、また、「うっとり」と酔えるような幼児保育者でありたいと思う。

それには、幼児保育者にしかなれなかった人ではなく、高いアントナテナを持った、感受性豊かな、その上、知性も教養(常識)もあるすばらしい人にご、幼児保育者になっていただきたいと思う。このように、優秀な人材が競って幼児保育者になりたがるような、そんな社会が一日も早く来るように、私たち幼児保育者が努力していかなければならない。

(お茶の水幼稚園)